

この前、中学校時代の校長先生のことを書いていたら、小学校の校長先生のことも思い出した。大変申し訳ないが、お名前は忘れてしまっている。だが、一つだけ忘れられないエピソードがある。

小学校6年生だった。卒業の時期が近づき、担任の先生から、給食の時間に班ごとに校長室に行き、校長先生と給食を食べることになったとの話があった。私の記憶では、私を含めて誰も喜んではいなかったように思う。校長先生からのオーダーだったらしい。

私たちの班が校長室に行く日になった。それまで、校長先生とお話したことはなかったように思う。緊張しながら校長室で給食を食べた記憶があり、そのときの様子が結構鮮明に残っている。なぜなら、驚いたことがあったからである。

その日の献立には、コッペパンがあった。あの当時では、よくあることである。マーガリンをつけたり、いちごジャムをつけたり、私はあまり好きではなかったマーマレードをつけたりしてパンをほおばったものである。焼きそばが出た日には、パンに焼きそばをはさんで、焼きそばパンにして食べた。それはそれは、あの頃の小学生にとっては、最高のごちそうという位置づけだった。

校長先生との会食の日は、コッペパンとマーガリンの組合せだった。私たちは、いつもようにパンにマーガリンをつけながらかじる、あるいはパンを半分に開いてマーガリンをぬり、マーガリンパンにして食べていた。残念ながら、パンをちぎりながら食べる上品さは持ち合わせていなかった。

校長先生はというと、何とナイフとフォークを使って、あのコッペパンを切っているのではないか。衝撃であった。ちゃんとした大人は、こうやってパンを食べるのか。自分たちは、何と下品な子どもたちなのだろうかと思ったものである。大人になったら、パンはああやって食べるのだと思い知らされた。

しかしである。それ以降、パンを食べている大人を数え切れないほど見てきたが、あの校長先生のようにナイフとフォークを使って上品に食べている方は見たことがないように思う。多くは、ちぎって食べている。私もそうしている。ホテルの朝食など、世の中で出てくるパンは、給食に出てくるコッペパンよりも小さい。あれをナイフとフォークで切っていたら、かえってこっけいに見えるかもしれない。

あの校長先生は、普段からコッペパンをナイフとフォークで切るような生活をしていただろうか。明治時代末期から大正時代なら、それも合うような気がしないでもない。いや、フランスのルイ王朝時代か。いやいやあの校長先生は、あのとき、あえてコッペパンをナイフとフォークで切ったのかもしれない。私たちに食事のマナーを教えるために。それにしても慣れた手つきであった。

結局、私たちの班には、その場を盛り上げるムードメーカーがいたわけでもなく、校長先生からの質問めいたものがいくつかあっただけで、緊張したまま会食は終了した。校長先生も、もう少し場を盛り上げてくれてもいいのではと思ったものである。上品な方は、口数も少ないのだろうか。

大人になってからは、コッペパンを食べる機会は減った。学校の給食も米飯が主となった。私の結論としては、やはり、コッペパンはまるごとかじるのが一番うまい。そもそも小学生が元気よくかじることを想定した形なのではないか。

今でも、コンビニエンスストアに行くと、パンコーナーには必ず焼きそばパンが置いてある。ついつい買ってしまうことがある。今でも焼きそばパンが好きである。給食のコッペパンよりは小ぶりではあるが。もうあの頃の給食のように、自作の焼きそばパンを食べることはできないのだろうか。コッペパンと小学校の校長先生、私にとっては特別の思い出である。